



レセプションにて開催地元自治体首長さん達と。左から鈴木公平・豊田市長、筆者、増岡錦也・瀬戸市長、加藤梅雄・長久手町長

大都市近郊に残された里山として、貴重な植生や原風景が保たれていたことは先に述べた。しかしながらここは、白神山系や屋久島のような、手つかずの大自然ではない。実のところ、この近辺の山々は、戦中・戦後に、^{ようきょう}窯業の燃料として薪を伐り出した関係で、荒

なければ」：そんな思いと責任感に駆られたことを昨日のように思い出す。

人と自然が共生してきた里山が候補地に

愛知県が国際博覧会（当時は「あいち万博」と呼ばならわしていた）の誘致構想を発表したのが昭和六十三年（一九八八年）。かつてオリンピックの名古屋招致に失敗し、悲嘆に暮れた名古屋ならびに愛知が、再び夢をかけて国際イベントの招致に取り組んだのが、二十世紀初頭に開催する万博の誘致であった。

思えば今回の博覧会は、複雑な経緯をたどってきたが、その出発点がここにある。今でこそ環境を前面に押し出した博覧会であるが、当初、当時の鈴木礼治・前愛知県知事の念頭にあったのは、環境というより、地域活性の起爆剤としての博覧会であったと思われる。事実、博覧会の実施は、愛知学術研究開発ゾーンの地区整備の一環としてとらえられ、構想段階当初の博覧会テーマは「技術・文化・交流——新しい地球創造」であった。当時はバブルの最盛期。新空港、中央リニア新幹線、第二東名・名神高速道呼び込み、集中的資本投下を呼び込むために、鈴木前知事が掲げたのが、愛知における博覧会開催誘致構想であったのは間違い

ない。

その後、博覧会の開催候補地が、瀬戸市南東部丘陵と発表されたのが二年後の平成二年二月。緑豊かな瀬戸市南東部丘陵の「海上（かいしよ）」地域が候補地とされたことから、後に猛烈な反対運動が、環境団体や反対派・市民グループによって展開されることになる。海上地域は、海の上と書きながらその実は山の中で、人家がわずかに数軒のみ残る里山である。昭和三十年代まではそれでも何十軒といった集落であったが、経済成長期に次第に住民は市街地に転出し、今日の状況に至ることになる。山間の平地では、今でも水田や畑作が続けられ、名古屋市中心部から車で一時間圏にもかかわらず、それとは思えないようなのかな里山の自然の光景は、今となっては貴重な日本の原風景でもある。実は私も、かねて六月頃になると家族を連れてよく螢を見に海上へ出かけたものである。

ヒメボタルの棲息する静かな山里は、それ自体、都市近郊にあっての貴重な自然であることは間違いない。ここには里山としての豊かな植生が残されており、シデコブシやスズカカンアオイ、ギフチョウなどの貴重種・絶滅危惧種がいくつか確認され、またオオタカの飛来も時に見かけられることもあった。

廃した禿山に近い状況にあったものを、以来、地域住民が植林につとめ、下草刈りなど、折々に手を入れてきた中でようやく今日の植生に至ったもので、文字通り人と自然が共生してきた里山である。

反対運動の宣伝で、あたかも全く手をつけてはならない大自然のような印象を与え、また情緒的なマスコミ報道によって、開発が悪で、保全が善といったイメージが一時期伝えられたが、実際は上記のような場所であり、冷静な真の環境論議を許さない雰囲気の中で万博開催の是非が論じられたのは、いささか残念であった。本来、人間が生きていく上で、環境との共生をどう図るか、これからの都市はどうあるべきか、そのために、自らのライフスタイルの変更まで踏み込んだ環境論議の高まりと環境意識の啓発を期待したかったが、誘致段階において多くは、木を一本切ったら自然破壊で、手付かずにすることが環境保護といった短絡的な論議が、それを封殺したことも今から思えば惜しまれることであった。

初期構想にはらむ矛盾と、克服への努力

地元議員として我々は、博覧会の誘致推進の議員連盟を結成することになるが、その趣旨は盲目的な開発